



果樹試験場栽培部
田嶋 皓 主査研究員



カンキツ類は、苗を植えてから果実ができるまで時間がかかります。将来の需要や生産農家の状況を想定し、研究を進めなければなりません。生産者が新品種に求める性質は、時代によって変化しますが、今まで以上に作りやすく、味の良いものが望まれています。これからも生産者の所得向上をめざし、栽培のしやすさや加工品への活用なども重視しながら、新品種の育成に努めていきたいです。



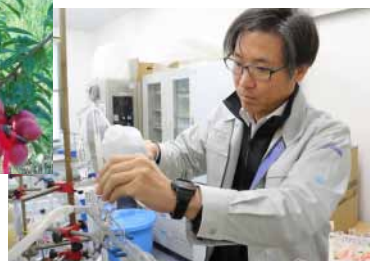
ミカンの新品種と機能性に 着目したカンキツ育種

果樹試験場では、収穫時期の異なるオリジナル品種を切れめなく出荷する「温州ミカンのシリーズ出荷」の実現に向け、和歌山の風土に適し、品質の良い果実を安定して収穫できる新品種の開発に取り組んでいます。平成24年に品種登録された「YN26」は、9月中下旬と極めて早い時期に成熟を迎えます。また、平成26年に品種登録された「きゅうき」は、浮皮が少なく品質が良いことから市場での高評価が期待されており、「YN26」とともに徐々に産地化が進んでいます。さらには、健康維持や病気予防に良いとされる成分を含む北山村特産「ジャバラ」に着目し、「ジャバラ」を親とした付加価値の高い新品種の育成にも取り組んでいます。



カキオリジナル品種「紀州てまり」の開発

近年、色や香りに特徴のあるウメの新品種が誕生していますが、「露茜」は果肉が赤色という特徴があり、新たな商材として食品メーカーからも注目されています。うめ研究所では、主要品種「南高」とは樹の性質が異なる「露茜」に合った栽培方法を開発し、管理方法を解説したマニュアルを作成して産地化を進めるとともに、収穫後に果実を赤く色づかせる特許技術の開発により、安定的な供給体制を確立しました。さらに県内企業や県工業技術センターと協働で開発した赤色梅シロップは、消費者から好評を得ています。引き続き、産地形成や加工品開発につながる研究を進め、安定生産と消費拡大につなげていきます。



かき・もも研究所では、平成20年に赤みが鮮やかな早生の「早秋」と大きくて食味のよい「太秋」を交配し、約9年の試験研究を経て、10月中下旬と早くから収穫でき、おいしくて色鮮やかなオリジナル品種「紀州てまり」を開発しました。県内で出荷されるカキの8割近くが渋柿ですが、新品種は収穫後に脱渋の必要がない完全甘柿です。昨年、カキのアメリカ向け輸出解禁となり、和歌山県産のカキが国内で初めて出荷されました。新品種の市場への本格的な出荷は、5年後の秋を予定していますが、本県の新ブランドとしての地位を確立することができるよう、さらなる研究を進めています。

イチゴオリジナル品種の開発

大粒で贈答用にも使われる「まりひめ」は、農業試験場で開発されたもので、今では、ブランドの地位を確立し、県内外で人気のある品種です。また、イチゴ栽培の大敵である炭そ病に強く、より生産しやすい品種の開発を進め、「紀の香」を開発しました。新品種は、「まりひめ」と同程度の糖度があり、酸味もほどよいのが特徴で、11月中旬と早くから収穫できる優れた特性は、市場において、高い競争力を有しています。現在、場内での栽培試験と、県内農家で試作を行っており、今後の普及が期待されます。



和歌山県いちご生産組合連合会 会長 松本 智行さん



和歌山オリジナルイチゴ「まりひめ」は、ジューシーで甘くておいしいと首都圏などの市場から高い評価をいただき、高値で取引されており、さらなる販売の拡大が期待されます。高品質なイチゴを安定して出荷するためにも、試験場における収量の増加や品質向上に向けた試験研究・新品種の開発に協力し、和歌山と言えば「イチゴ」と言ってもらえるようにがんばってまいります。

未来につながる
新品種・新技術の開発

県では、生産現場のニーズを的確に反映し、生産者の所得向上や地域の活性化につながる新品種・新技術の開発を加速させるため、農林水産関係者などから研究テーマを募集し、外部の専門家の意見をもとに実施する研究を決定する「農林水産業競争力アップ技術開発事業」を平成24年から創設し、試験研究に取り組んでいます。今回は、将来を見据えた新品種の育成や生産性向上の新技術を開発する注目の試験研究と、開発した新品種・新技術の普及をはじめ、経営強化のための加工品の開発など、実用化・商品化に向けた取組を紹介します。



イチゴ新品種の栽培見学会

